



フランス語とイタリア語における指示代名詞の分布について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2015-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): demonstrative pronouns, French, Italian 作成者: 藤田, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3813

フランス語とイタリア語における 指示代名詞の分布について

藤田 健

Distribution of the Demonstrative Pronouns in French and Italian

Takeshi FUJITA

要旨：In French the system of the demonstrative pronouns consists of seven elements, *ce, cela, ça, ceci, celui, celui-ci* and *celui-là*, while in Italian it consists of four elements, *questo, quello, ciò* and *costui/colui*. We examine the syntactic distribution of these demonstrative pronouns in the corpus (a French text and its Italian translation and an Italian text and its French translation), taking into account the distributional correspondence between them and personal pronouns. We observe that there is no direct correspondence of the demonstrative pronouns in these two languages. Our analysis shows that in both of these languages each demonstrative pronoun is placed on the scale of concrete/abstract reference and that the use of the neuter demonstrative pronouns in a strict sense is much more frequent in French than in Italian.

キーワード：demonstrative pronouns, French, Italian

0. 序論

指示代名詞は、指示詞という文法カテゴリーの下位体系をなす要素であると同時に、具体的もしくは抽象的な事物・事態を指示する代名詞にも属する。あらゆる言語に観察される一般的なカテゴリーであると言えるが、言語間でその特徴に差が見られる。

指示詞は、発話者からの距離の遠近に応じて下位区分される場合が多い。その代表的なものは、遠距離・中距離・近距離の三項体系をなすものと、中遠距離・近距離の二項体系をなすものであろう。前者は日本語に、後者は英語にそれぞれ観察される。距離に関してどの体系を選択するかは、必ずしも言語の系統関係によって決まるものではない。例えば、ロマンス諸語では、スペイン語とポルトガル語が日本語と同じ三項体系、イタリア語とルーマニア語が英語と同じ二項体系、そしてフランス語が距離の区別を設けない単一の体系をそれぞれ有している。この事実は、文法における指示詞のカテゴリー化が、系統関係に密接な関連をもっている冠詞や代名詞のような文

法カテゴリーとは独立した形で行われている可能性を示唆している。

従来、それぞれの言語において指示形容詞について個別に研究が進められているが、言語間の対照的視点からの研究はあまり進んでいないのが現状である。本稿では、フランス語とイタリア語の指示代名詞の体系を対照的に考察すべく、両言語における分布を詳細に検討し、対応関係がどのようなになっているかという点に焦点をあてて分析を進めていく。それぞれの言語における指示代名詞が他言語でどのような形式によって表現されるかを観察することによって、両言語の指示代名詞の相違点が明らかになる。両言語は指示代名詞の下位区分が異なるため、一方の言語の下位カテゴリーが他言語においてどのような下位カテゴリーに対応しているかを見ていく。特に、フランス語の指示詞は距離によるカテゴリー化が一部は残っているものの、不完全なものであるため、距離によるカテゴリー化を厳密に保持しているイタリア語の指示詞とどのような対応関係にあるのかは実際の例を観察しなければ予想が難しいという事情がある。翻訳を含めたテキストをコーパスとして用い、従来の研究では明らかになっていない両言語における指示代名詞の対応関係を明らかにし、当該要素に関して新たな特徴付けを行うことが本稿の目的である¹。

1. 両言語における指示代名詞の体系

まず、フランス語とイタリア語における指示代名詞がどのような体系となっているか、それぞれの要素がどのような基本的性質を持ち、どんな機能をはたすのかについて概観する。

1. 1. フランス語

1. 1. 1. 指示代名詞の起源

ロマンス諸語に属するフランス語において、指示代名詞の起源は当然ながらラテン語のそれに求められる。Deloffre and Hellegouarc'h(1988)によると、ラテン語からフランス語にいたる指示詞の歴史は、小辞の付加による形式の強化と文法機能に応じた形式の再配分によって特徴づけられる(p.146)。前者に関しては、指示的小辞 *ecce* を指示詞に付加した形式がフランス語の指示詞として継承された。後者については、ラテン語においては距離の遠近の対立により形式が分化していたのに対し、フランス語ではこの形式の対立が形容詞・代名詞という機能的対立へと転換された。フランス語の指示代名詞は、ラテン語の遠称及び近称の機能をもつ指示詞を起源に持つ形式である²。

(1) *eccilla* (遠称女性単数形) → *cele* → *celle* (女性単数形代名詞)

eccillos (遠称男性複数形) → *cels* → *ceux* (男性複数形代名詞)

eccillas (遠称女性複数形) → *celes* → *celles* (女性複数形代名詞)

**eccillui*³ (関係詞 *cui* からの類推) → *celui* (男性単数形代名詞)

eccehoc (近称中性単数形) → *ço* → *ce* (中性形代名詞)

¹ 本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表すものである。

² ラテン語の中称の機能をもつ指示詞からは、フランス語の指示形容詞が派生している。

³ *は実際に確認された形式ではなく、理論的に再構された形式であることを表す。

この結果、フランス語では遠近の対立を示す別の手段が必要となった。このため、更に接尾辞-ci/-làを付加することによってこの対立を示すこととなる。

(2) celui-ci (近称) celle-là (中遠称)

1. 1. 2. 指示代名詞の機能

フランス語の指示代名詞は、性数変化をするもの（以下では性数変化形と呼ぶ）と中性のもの（以下中性形）とに分類される。前者は、接尾辞を伴わない場合（以下では単純形と呼ぶ）、現代フランス語においてはいわゆる指示的機能と自立性を失い、特別な位置を占めていると言える(Deloffre and Hellegouarc'h p.148)。自立性を失っているというのは、この性数変化単純形が前置詞 de もしくは関係節や分詞、形容詞を伴ってのみ用いられるという事実を指している⁴。この二つの性質を失っているという点で、機能的観点からはこの形式は、他の指示代名詞よりも「定冠詞＋名詞」に近いと言える。ただし、他の指示代名詞と同様に、特定化の機能は保持している。

(3) J'ai vu deux films : celui que j'ai vu hier m'a particulièrement plu.

I saw two films that which I saw yesterday me particularly pleased

“私は映画を二本見た。昨日見たものが特に気に入った。”

この例において、指示代名詞 celui は関係節を伴って、前述の映画二本のうちの一本に特定化する機能を果たしている。

中性単純形 ce は主に二つの機能をもっている。一つは関係節を伴うもので、この機能を果たす場合には、性数変化単純形と同様に指示的機能と自立性を失っており、無生物の集合を指示する。ce にはこれとは異なる機能もあり、動詞 être の主語として用いられる場合には指示形容詞と同じ価値を保持し⁵、既に言及された事物や事実を指示する(Deloffre and Hellegouarc'h p.149)。この機能における ce は音韻的な自立性を持たないため、音韻的に独立して生起する環境では中性複合形である cela もしくは ça が用いられる。

性数変化形で接尾辞を伴う形（以下複合形）は、基本的に既出の名詞句を受ける機能をもつが、直示的に用いられることもある。前者の機能では、指示対象が先行詞である名詞句と同じ場合と、より小さい集合である場合がある。

(4) a. Il a parlé avec le voisin. Celui-ci lui a dit que son père était malade.

he talked with the neighbour this him said that his father was ill

“彼は隣人と話した。その人は父が病気だと彼に言った。”

⁴ 分詞や形容詞を伴う用法は文法的に正しくないとする文法家もいるが、実際には優れた作家とされる者の文章にも見られる(Wagner and Pinchon1991 p.201, Price 2003 p.165, Judge and Healey 1995 p.78)。また、de 以外の前置詞を伴う場合もある(Batchelor and Chebli-Saadi 2011 p.615, Price p.165)。Les émissions sur la science m'intéressent plus que celles sur le sport.

the programs on the science me interest more than those on the sport

“科学の番組の方がスポーツの番組より僕にはおもしろい。”

⁵ 文語表現においては、ce が être 以外の動詞の主語として用いられることもある(Grevisse and Goosse2011 p.953)。また、特定の前置詞とともに成句表現を形成する(sur ce 「そこで」)。

b. J'ai apporté deux livres ; prenez celui-ci.

I brought two books take this one

“私は二冊の本を持ってきた。こちらをお取りなさい。”

-ci は空間・時間・談話における近接性を、-là は遠隔性を表すが、口語においてはその対立が失われつつあり、-ci の代わりに-là が用いられる傾向にある(Deloffre and Hellegouarc'h p.149, Martinet 1979 p.61, Grevisse and Goosse 2011 p.940)。

中性複合形 ceci, cela, ça は既に言及された要素や先行する発話内容を不確かさを添えながら指し示す。ça は cela を短縮した口語的形式である⁶。

(5) a. Lisez ce paragraphe. Elle n'a pas pu écrire ça.

read this paragraph she not could write that

“この段落を読みなさい。これを彼女が書いたはずがない。”

b. Elle a dit la vérité. Après cela, elle est partie.

she said the truth after that she left

“彼女は真実を語った。その後で、立ち去った。”

直示的に用いられることもあるが、この場合指示対象は無生物に限られる⁷。cela, ça は特定の事物や事実を指さずに、事態をあいまいに指す用法がある(Deloffre and Hellegouarc'h p.149,)。

(6) Comment cela va-t-il ? “いかがですか？”

how that goes

性数変化形の場合と同様に、口語においては ceci の代わりに ça を用いる傾向が強い(Deloffre and Hellegouarc'h p.149, Price 2003 p.163)。

1. 2. イタリア語

1. 2. 1. 指示代名詞の起源

イタリア語の指示詞も、ラテン語の指示詞に起源をもつ。ただし、イタリア語の指示代名詞は、俗ラテン語における指示的小辞*(ec)cu を指示詞に付加したものを継承したものである。

(7) *(ec)cu+istū(m) (小辞+近称指示詞) → questo (近称指示詞)

*(ec)cu+illū(m) (小辞+中遠称指示詞) → quello (中遠称指示詞)

*(ec)cu+illūi (小辞+関係詞 cui からの類推) → colui (指示代名詞)

*(ec)cu+istūi (小辞+3人称人称代名詞) → costui (指示代名詞)

古典ラテン語に起源をもつものもある。

(8) ecce+hōc (小辞+近称指示詞) → ciò (中性指示代名詞)

⁶ ただし、ça が文語において用いられることもある(Wagner and Pinchon p.205)。これに対して、cela が口語において用いられるのはまれである(Grevisse and Goosse p.944)。

⁷ ただし、口語表現においては軽蔑や愛情を伴って人を指示する場合もある(Grevisse and Goosse p.944, Wagner and Pinchon p.205)。

1. 2. 2. 指示代名詞の機能

Serianni(1997)は、モノを現実の空間や想定上の空間の中で指示する直示的機能のほかに、指示詞はすでに言及されたヒトやモノを指示する前方照応的機能と、後に言及するヒトやモノを指示する後方照応的機能をもつと指摘する(p.195)。

個々の指示代名詞の機能については、Dardano and Trifone(1997)は、代表的な指示代名詞である *questo* と *quello* に関して、*questo* は話者に近いヒトやモノを指し、*quello* は話者と聞き手から遠いヒトやモノを指すとする⁸。Sensini(1997)も、*questo* は話者（メッセージの発信者）に近いヒトやモノを指し、*quello* は話者からも聞き手（メッセージの受信者）からも遠いヒトやモノを指すとする。この距離の遠近は物理的距離、時間、談話、心理的空間のいずれにおいても成立する(pp.161-162)。Maiden and Robustelli(2000)は、*questo* は 1 人称指向(first-person oriented)であり、話者もしくは書き手が空間もしくは時間において近いとみなすものや何らかの方法で密接に関係づけられるものに適用されると説明する。しばしばそのような近さは、言及したばかりであることに対応することもある。これに対して *quello* は、遠さに対応する非 1 人称指向の要素である。すなわち、*questo* は名詞を 1 人称の領域に、*quello* は 2 人称及び 3 人称の領域にそれぞれ位置づける(p.82)⁹。

この二つの指示代名詞の男性単数形には、中性代名詞としての用法がある(Sensini p.212)。特に、*quello* は関係詞の先行詞としての機能を果たす¹⁰。

(9) *Quello che hai fatto è pazzesco.* “君がしたことは狂気の沙汰だ。”

that which (you) did is crazy

上記二つの他に、中性代名詞として *ciò* がある。主に文語で用いられ、ヒトや動物、特定の事物ではなく、事象や概念、すなわち命題内容を指示する(Maiden and Robustelli p.85, Proudfoot and Cardo 2013 p.72)。このため、関係節の先行詞としての機能を果たすことも多い。

(10) *Non ho capito ciò che hai detto.* “君が言ったことが僕には分からない。”

not (I) understood that which (you) said

口語では、代わりに *questo*, *quello* や代名詞クリティック *ne*, *ci*, *vi* が用いられる(Trifone and Palermo 2000 p.84, Sensini p.213, Dardano and Trifone p.252, Serianni pp.198-199)。

更に、文語においてヒトのみを指示する代名詞として *costui*, *colui* がある。性数に

⁸ 聞き手に近いヒトやモノを指す形式として *codesto* という形式もあるが、文学や官僚的な文章、トスカナ方言において用いられるのみである(Serianni 1997 p.195, Maiden and Robustelli 2000 p.83, Trifone and Palermo 2000 p.83)。本稿で用いたコーパスにおいても見られたのは数例のみなので、考察の対象外とする。

⁹ *questo* の男性複数形である *questi* と *quello* の男性複数形と関係づけられる *quegli* は、照応的に男性単数の指示詞としての機能を果たす。主に文語において見られる用法で、現代イタリア語では文法機能としては主語でのみ用いられる(Serianni p.196, Dardano and Trifone 1997 p.251, Sensini 1997 p.212, Trifone and Palermo p.83, Maiden and Robustelli p.84)。

¹⁰ *quello* が関係詞の先行詞となる場合、*quel* という自由変異形がある。

応じて以下のような形態をもつ。

男性単数形		女性単数形		複数形
costui	colui	costei	colei	costoro coloro

これらの要素は、代名詞としてのみ使用され、形容詞としての機能はもたないという特徴がある(Renzi et al. 2001 p.644)。

- (11) a. *il costui ragazzo b. *il colui uomo
 the this boy the that man

これらの要素は、しばしば侮蔑的なニュアンスを伴う(Renzi et al. p.644, Serianni p.199, Trifone and Palermo p.84, Dardano and Trifone p.251, Sensini p.213)。また、colui に特有の機能として、関係詞の先行詞として不定のヒトを指示する用法がある(Andorno 1999 p.57, Dardano and Trifone p.251, Trifone and Palermo p.84, Sensini p.213, Renzi et al. p.644)。

- (12) Colui che arriverà in ritardo non sarà ammesso alla riunione.
 that who will arrive late not will be admitted to the conference

“遅れてくる人は会議への入場が認められないだろう。”

また、costui は questo に対応し、話者に近いヒトを、colui は quello に対応し、話者から離れているヒトをそれぞれ指すという特徴付けがなされることもある(Trifone and Palermo p.83, Serianni p.199, Proudfoot and Cardo, p.72)。

1. 3. フランス語とイタリア語の指示代名詞の対応

ここで、フランス語で書かれたイタリア語の文法書と、イタリア語で書かれたフランス語の文法書を参照し、指示代名詞の対応がどのように記述されているかを見ていく。

まず、フランス語で書かれたイタリア語の文法書を見ると、以下のような対応が示される。

a) Ulysse and Ulysse(1988) pp.82-83

伊語	questo	quello	ciò	colui	costui
仏語	celui-ci	celui-là/ce	ceci/cela	celui	(ce type)

b) Vallé(2003) pp.51-53

伊語	questo	quello	ciò	colui/costui
仏語	ce/celui/celui-ci	ce/celui/celui-là	ce/cela	celui-là

共通している部分もあるが、文法書によって対応が異なる部分が観察される。Vallé は Ulysse and Ulysse よりも対応する形が多く記されており、questo に関しては中性の ce や性数変化単数形、quello は中性の ce がそれぞれ追加されている。ciò については Ulysse and Ulysse が複合形のみをあげているのに対して、Vallé は単純形もあげている。colui・costui については両方で捉え方が異なっている。

次に、イタリア語で書かれたフランス語の文法書については、以下のような対応が記されている。

a) Iorio(1996) pp.144-147

仏語	celui	celui-ci	celui-là	ce	ceci	cela	ça
伊語	questo/quello	questo	quello	quello/ciò	questo/ciò	quello/ciò	questo/ciò

b) Tartaglino and Gfeller(1993) p.61

仏語	celui	celui-ci	celui-là	ce	ceci
伊語	questo/quello	questo	quello	ciò/questo/quello	ciò/questo/quello
仏語	cela	ça			
伊語	ciò/questo/quello	ciò/questo/quello			

c) Luciani and Guiraud(1998) pp.77-79

仏語	celui	celui-ci	celui-là	ce	ceci	cela	ça
伊語	quello	questo	quello	quello	questo	questo/quello/ciò	(la cosa)

この場合も、文法書によって対応関係が異なっている部分がある。最も対応形式が少ないのが Luciani and Guiraud であるのに対して、Tartaglino and Gfeller は対応形式を多くあげている。これは、フランス語の中性代名詞に対してすべてイタリア語で 3 形式を対応させているからである。Iorio は中性代名詞すべてに ce を対応させている点では Tartaglino and Gfeller と共通しているが、全て 2 形式の対応にとどめている。性数変化形に関しては、3 文法書でかなり共通しているが、celui の対応に関して Luciani and Guiraud は quello のみにとどめている。

このように、イタリア語からフランス語、フランス語からイタリア語のいずれの場合も対応関係が文法書によって異なる部分があることが分かる。これは、両言語の指示代名詞の対応関係が決して自明ではないことを示している。このことから、実際のコーパスによってその対応関係を詳細に検討することは、両言語の指示代名詞の体系の違いを理解する上で重要であると言える。

2. 指示代名詞の分布

本節では、それぞれの言語における指示代名詞の分布を観察する。それぞれの言語のカテゴリーごとに、指示代名詞がどの程度の割合で生起するかを示し、その特徴を記述する。

使用するテキストは、アンドレ・マルロー作「人間の条件」とジャン・マリ・ギュスターヴ・ル・クレジオ作「調書」（いずれもフランス語作品）の原典とイタリア語訳、イタロ・カルヴィーノ作「木のぼり男爵」（イタリア語作品）の原典とフランス語訳である¹¹。いずれも小説で、地の文と会話部分に分けられるため、発話のタイプである語りと談話の区別も考慮に入れて分布を見ていく。語りとは小説の地の文のように特定

¹¹ 以下では、出典を示す際に作品を次に示す略号で表すこととする。
人間の条件—CH、調書—PV、木のぼり男爵—BR

の対話者を想定しない発話であり、談話とは会話のように特定の対話者が存在する発話行為における発話である¹²。

2. 1. フランス語における分布

フランス語の全テキストにおいて、指示代名詞の生起数は 3104 例であった。この中で、ce は 1962 例、cela は 167 例、ceci は 16 例、ça は 489 例、celui は 356 例、celui-ci は 80 例、celui-là は 34 例である。このことから、フランス語の指示代名詞の中で、ce の使用頻度が突出して高い(63.2%)と言える。それぞれのカテゴリーについて、語りと談話に分けた分布を加えて示すと以下のようになる。

	語り	談話	総数
ce	1046	916	1962
cela	116	51	167
ceci	6	10	16
ça	89	400	489
celui	277	79	356
celui-ci	61	19	80
celui-là	24	10	34
総数	1629	1475	3104

この結果から分かるのは、下位カテゴリー間で分布に偏りが見られるということである。今回分析の対象としたテキストには、語りの部分が談話部分よりもかなり分量が多いという共通点が見られる。これは、小説というジャンルの文学作品には一般的に観察される傾向である。しかし、語りと談話の生起例を比較すると、それほど大きな差は見られない。特に、cela のくだけた形式である ça の談話における生起数が極めて多いと言える。これは、くだけた形式が口語において好まれるという一般的な傾向から当然のことであろう。使用頻度の高い ce については、談話において用いられる例がかなり多い。このようなことから、談話における生起数が相対的に高くなっていると言える。これに対して、celui は語りにおける生起例が極めて多い。これは、1.1.2 節で述べたように、この指示代名詞が自立性を失っており、直示的な機能をもっていないため、直示的用法が中心となる談話において使用頻度が低くなっていると考えられる。

全体としては、テキストにおける語りと談話の比率に比して、指示代名詞の談話において生起する割合が高いと言える。

2. 2. イタリア語における分布

イタリア語の全テキストにおいて、指示形容詞の生起数は 978 例であった。この中

¹² 語り(récit)と談話(discours)には別の定義もある。Maingueneau(1994)は、Benveniste(1966)の考え方に則って次のように定義づけている。談話とは、発話状況によってその指示内容が決定される要素である転位語(embrayeur)を含んでいる発話のタイプで、語りは転位語を含んでいないものである(p.74)。前者は主に口語、後者は文語に対応するが、必ずしもこの関係が成立するとは限らない。本稿では、指示詞の解釈においては、特定の対話者の存在の有無が重要な役割を果たしているとの認識から、本文で示した定義に基づいて分析を進めることとする。

で、questo は 254 例、quello は 628 例、ciò は 54 例、costui は 42 例である。このことから、イタリア語の指示形容詞では quello の使用頻度が突出して高くなっている (64.2%)。それぞれのカテゴリーについて、語りと談話に分けた分布を加えて示すと以下のようなになる。

	語り	談話	総数
questo	103	151	254
quello	436	192	628
ciò	35	19	54
costui	25	17	42
総数	599	379	978

この結果から、イタリア語の指示形容詞の場合にも下位カテゴリー間で分布に偏りが見られるということが分かる。イタリア語の場合には、語りと談話における生起数には違いが見られ、語りの方が多。これは、既に述べたように語りのテキストの分量が談話よりも相対的に多いので、生起数もそれにある程度対応していると言えよう。ただし、近称を表す questo だけは談話における生起数の方が多い。これは、近称の指示代名詞が直示的に用いられる場合が多いという特徴と関係していると考えられる。

これに対して、中遠称を表す quello は明らかに語りにおける生起数が多くなっている。quello が照応的に用いられる場合が多いという特徴がこのような分布の原因となっていると考えられる。

3. フランス語とイタリア語の間の指示代名詞の対応

本節では、フランス語とイタリア語について得られた結果を比較検討していく。1 節において述べたように、フランス語の指示詞は距離に関しては単一の体系となっているため、イタリア語の指示代名詞との単純な比較はできない。従って、本稿ではそれぞれの言語における指示代名詞の対応関係に焦点を当て、その分布がどのようなになっているかを観察した上で、両言語における指示代名詞の機能について分析を進めることとする。一方の言語の指示代名詞が他方においてどのような形式に対応しているかを見ることによって、両言語における指示形容詞の機能がどのような関係にあるのかを考察する。

3. 1. フランス語の指示代名詞のイタリア語における対応表現

まず、フランス語の指示代名詞がイタリア語の対応表現においてどのような形式で現れるかを観察する。本稿が対象としたテキストにおいて生起したフランス語の指示代名詞は 3104 例であるが、この中でイタリア語テキストにおいて対応表現がみとめられない例を除いた数は 1218 例である¹³。下位カテゴリーごとの内訳は、ce が 509 例、cela が 107 例、ça が 182 例、ceci が 12 例、celui が 309 例、celui-ci が 74 例、celui-là が 25 例である。それぞれのカテゴリーごとにイタリア語における対応関係を示したの

¹³ 対応表現がみとめられない場合とは、名詞句ではなく副詞等の表現に変えられているものや、全く対応する部分が見出されないものである。

が以下の表である¹⁴。

	questo	quello	ciò	costui	人称代名 詞	その他
ce 509 例	49 (9.6%)	240 (47.2%)	27 (5.3%)	2 (0.4%)	11 (2.2%)	180 (35.4%)
cela 107 例	48 (44.9%)	5 (4.7%)	8 (7.5%)	0	6 (5.6%)	40 (37.4%)
ça 182 例	55 (30.2%)	3 (1.6%)	4 (2.2%)	0	20 (11.0%)	100 (54.9%)
ceci 12 例	6 (50%)	0	0	0	0	6 (50%)
celui 309 例	1 (0.3%)	202 (65.4%)	1 (0.3%)	15 (4.9%)	2 (0.6%)	88 (28.5%)
celui-ci 74 例	12 (16.2%)	5 (6.8%)	0	8 (10.8%)	15 (20.3%)	34 (45.9%)
celui-là 25 例	4 (16%)	10 (40%)	0	2 (8%)	1 (4%)	8 (32%)

この調査から、ce, celui, celui-là への対応例として最も多いのが中遠称の quello であるのに対し、cela, ça, ceci への対応例として最も多いのは近称の questo であるという興味深い結果が得られる。以下にそれぞれの例を示す。

(13) フランス語の ce にイタリア語の quello が対応している例 (BR p.11)

- a. Il ne faut pas s'étonner si ce fut là l'origine du geste prémédité de Côme, et de
it should not be surprised if it was the origin of the act premeditated of and of
ce qui s'ensuivit.
what ensue

- b. ...tanto che non c'è da stupirsi se di lì Cosimo maturò il suo gesto e
so much that not there is to be surprised if from there premeditated his act and
quel che ne seguì.
that which it followed

“ こうしてコジモがその行為とそれに続くものを成熟させたとしても驚くことではない。”

(14) フランス語の celui にイタリア語の quello が対応している例 (BR p.10)

- a. Pour ne pas parler des pattes de sauterelles — celles de derrière, bien dures et
to not speak of the legs of grasshoppers those of behind well hard and
en dents de scie — dont elle avait fait une mosaïque sur une tarte.
in teeth of saw of which she had made a mosaic on a tart

¹⁴ 括弧内の数字はそれぞれのカテゴリーにおける割合を示す。「その他」には、名詞句、不定代名詞等が含まれる。

- b. ...per non dire delle zampe di cavalletta, quelle di dietro, dure e seghettate, messe a
to not talk of the legs of grasshoppers these of behind hard and serrate put in
mosaico su una torta;
mosaic on a tart

“その他、パイの上にモザイク模様にした、バツタのかたくてギザギザの後ろ脚”

(15) フランス語の *celui-là* にイタリア語の *quello* が対応している例 (PV p.146)

- a. Mais ceux-là ne comptaient pas ; ils n'étaient que fantômes et Cie.
but those not mattered they were only ghosts and Company
- b. Ma quelli non contavano: erano solo fantasmi & Co.
but those not mattered were only ghosts and Company

“だがそれらは問題にはならなかった。幽霊の会社に過ぎなかった。”

(16) フランス語の *cela* にイタリア語の *questo* が対応している例 (CH p.22)

- a. Ce n'est pas cela, car chacun reconnaît sans peine la voix des autres.
that is not that because each recognizes without effort the voice of the others
- b. Non si tratta di questo perché tutti riconoscono senza sforzo la voce degli altri.
it is not this because all recognize without effort the voice of the others

“そうでもない。誰でも他人の声は簡単に聞き分けるからね。”

(17) フランス語の *ça* にイタリア語の *questo* が対応している例 (PV p.37)

- a. Je suppose que c'est une habitude ? C'est ça que vous voulez dire ?
I suppose that that is a habit it is that that you want say
- b. Suppongo che sia un'abitudine. È questo che vuole dire?
(I) suppose that (it) is a habit is this that (you) want say

“習慣じゃないかな。そういうことが言いたいんでしょう。”

(18) フランス語の *ceci* にイタリア語の *questo* が対応している例 (PV p.31)

- a. Tout ceci, bien sûr, avait une histoire légendaire, qu'on pouvait inventer mille
all this of course had a history legendary that one could invent thousand
fois de suite, sans jamais se tromper.
times in succession without ever be mistaken
- b. Tutto questo, certo, aveva una storia leggendaria, che poteva essere inventata
all this sure had a history legendary that could be invented
mille volte di seguito, senza mai sbagliarsi.
thousand times in succession without ever be mistaken

“これにはもちろん伝説的な歴史があって、何度続けて作り出しても決して間違えようのないものだった。”

既に述べたように、フランス語の指示詞とイタリア語の指示詞の対応は、距離の遠近によって捉えることはできない。従って、*ce*, *celui*, *celui-là* と *cela*, *ça*, *ceci* は別の要因で機能的に区別されると考えられる。ここで重要と考えられるのは、イタリア語において中遠称の *quello* は照応的機能を果たす場合が多いのに対して、近称の *questo*

は直示的機能を果たす場合が少なくないという違いである。この傾向は、両者の指示代名詞としての特徴の違いに結びついていると考えることができる。直示的機能というのは、その場に存在する要素を指し示すのが基本であるために、指示性に具体性が伴う。これに対して、照応的機能は談話において導入された要素を指し示すことから、指示性に具体性だけではなく抽象性も含まれると言える。フランス語の指示代名詞も歴史的には距離の遠近に対応する形式がもとになっているが、現在の体系では遠近を示す機能が失われ、指示性の抽象性の度合いが大きな要素となっていると考えることができる。具体的には、*cela*, *ça*, *ceci* が具体性を伴う指示性を有するのに対し、*ce*, *celui*, *celui-là* は抽象性を伴う指示性を有すると特徴づけることができよう。

ここで興味深いのが、人称代名詞との対応である。*ça* は 1 割以上の割合で人称代名詞と対応しているが、それはすべて中性の人称代名詞 *lo* 及びこれに準ずる機能を持つ *la* である。このことから、*ça* はある程度の漠然性を伴った指示が可能であると言える。以下に例を示す。

(19) フランス語の *ça* にイタリア語の中性人称代名詞が対応している例 (CH p.262)

a. « C'est leur sang », pensait-il. Mais ça ne pouvait pas se dire.

that is their blood thought he but that not could be said

b. “È il loro sangue”, pensava. Ma non riusciva a dirlo.

is their blood (he) thought but not could say it

“「これが彼らの血だ」と思った。しかし、口に出しては言えなかった。”

この傾向は *cela* についてはそれほど強くなく、*ceci* にいたっては人称代名詞の対応例が皆無である。*ceci* は現代フランス語においてそもそも使用頻度が極めて低いことからこの傾向が認められないと言える。*cela* については、次節で述べるように、語りで多く用いられる形式である。漠然とした指示は発話状況に依存した場面で多く見られるものであると考えられ、その意味で談話においてこの機能が多く見られると考えられる。この機能は、*ça* の抽象的な指示機能を示していると言える。

また、*questo* への対応という点ではそれほど割合が高くない *celui-ci* については、人称代名詞への対応がほぼ 2 割という高い割合であり、その中でも具体的なヒトや事物を指示するが多い。以下がその例である。

(20) フランス語の *celui-ci* にイタリア語の人称代名詞が対応している例 (BR p.107)

a. Puisque les gens avertis n'avaient cure du brigand, l'envie de connaître

because the people experienced cared little about the brigand the urge to get to know

celui-ci lui passa.

this him passed

b. La curiosità d'incontrarlo gli passò, perché capì che di Gian dei Brughi

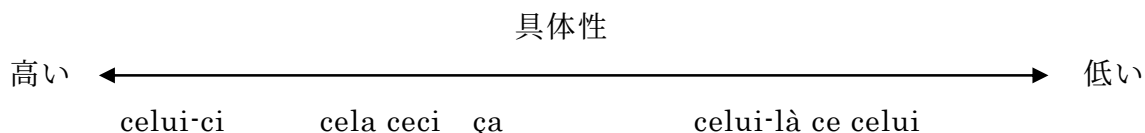
the curiosity to meet him him passed because (he) understood that

alla gente più esperta non importava niente.

to the people most experienced not matter at all

“彼に会ってみたいという好奇心も消えた。ヒースのジャンなど経験を積んだ人た

以上の結果をまとめると以下の図に示される。



37

- b. Côme regardait le monde du haut de son arbre : tout, vu de là, était différent,
 watched the world of the top of his tree all seen from there was different
 et c'était un premier sujet d'amusement.
 and that was a first subject of entertainment

“ コジモは木の上から世界を眺めていた。あらゆるものが高みから見ると違っていて、これだけでもおもしろかった。”

(22) イタリア語の *questo* がフランス語の *cela* に対応している例 (BR p.53)

- a. Tutto questo per loro due fu un momento, un girare d'occhi.
 all this for them two was a moment a turn of eyes

- b. Les deux enfants ne jetèrent sur tout cela qu'un coup d'œil.
 the two children had at all that only a quick look

“ これは二人にとって、まったく一瞬のできごとであった。”

(23) イタリア語の *questo* がフランス語の *ça* に対応している例 (CHp.51)

- a. Egli alzò le spalle come per dire: “Questa è una cosa che ti riguarda”.
 he shrugged the shoulders as for say this is a thing that you concern

- b. Il haussa l'épaule, comme pour dire : « Ça te regarde. »
 he shrugged the shoulders as for say that you concern

“ 彼は、まるで「それはお前の勝手だ」とでも言うように、肩をすくめた。”

(24) イタリア語の *quello* がフランス語の *ce* に対応している例 (PV p.259)

- a. E quelle non erano più vere sbarre...
 and those not were any more real bars

- b. Et qui plus est, ce n'étaient plus trop les barreaux de la fenêtre, non plus ;
 and what more is that not was any more too much the bars of the window either

“ そればかりか、それはもはや窓の鉄格子とは言えなかった。”

(25) イタリア語の *quello* がフランス語の *celui* に対応している例 (PV p.56)

- a. Quelli che non vogliono vivere in seno alla natura, nel seno caldo caldo, nel seno
 those who not want live in breast in the nature in the breast hot hot in the breast
 pieno di fragranze, di fruscii e di aloni della terra.
 full of scent of rustles and of halos of the earth

- b. Ceux qui ne veulent pas vivre dans le sein de la terre, dans le sein tout chaud, dans
 those who not want live in the breast of the earth in the breast all hot in
 le sein tout plein de senteurs de bruissements et de halos de la terre ;
 the breast all full of scent of rustles and of halos of the earth

“ 大地のふところ、とても熱いふところに抱かれて、大地の匂いとざわめきと量とでいっぱい
 のふところに抱かれて生きようと欲しない人びと ”

(26) イタリア語の *ciò* がフランス語の *ce* に対応している例 (PV p.17)

- a. Quando ho deciso di abitare qui, ho preso tutto ciò che occorreva, come se fossi
 when (I) decided to live here (I) took all that which is necessary as if (I) had

andato a pescare, sono ritornato di notte, e poi ho gettato la moto in mare.

gone fishing (I) returned the night and then (I) chucked the bike in sea

- b. Quand j'ai décidé d'habiter ici, j'ai pris tout ce qu'il fallait, comme si j'allais à la
when I decided to live here I took all that it is necessary as if I went to the
pêche, je suis revenu la nuit, et puis j'ai balancé ma moto à la mer.

fishing I returned the night and then I chucked my bike in the sea

“ここに住むと決めたとき、僕は釣りに行くかのように必要なものを全部持って行って、
夜になって帰って来て、バイクを海に投げ込んだ。”

- (27) イタリア語の *colui* がフランス語の *celui* に対応している例 (CH p.59)

- a. Gli uomini non sono i miei simili; sono coloro che mi osservano e mi
the men not are my fellow creatures (they) are those who me watch and me
giudicano;

judge

- b. Les hommes ne sont pas mes semblables, ils sont ceux qui me regardent et me
the men not are my fellow creatures they are those who me watch and me
jugent ;

judge

“その人間はおれの仲間じゃない。やつらはおれを見、おれを裁く連中だ。”

- (28) イタリア語の *costui* がフランス語の人称代名詞に対応している例 (CH p.88)

- a. Io non ho fatto nulla contro costoro ed ho spesso ammirato il loro slancio.

I not did anything against these and (I) often admired their drive

- b. Je n'ai rien fait contre eux, et j'ai souvent admiré leur allant.

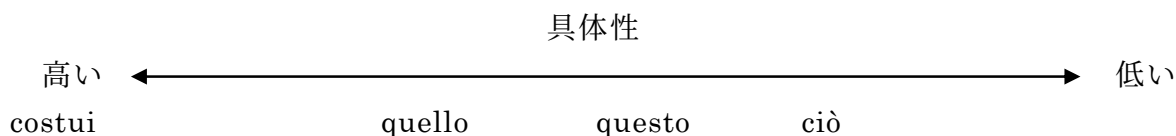
I not anything did against them and I often admired their drive

“私は彼らに決して楯ついたことはなかった。しばしば彼らの熱誠を称賛したくらいだ。”

ここで注目すべきは、比較的具体性が高いと思われる近称の *questo* が中性の指示代名詞との対応する例が多いという点である。性数変化する *celui* の使用頻度が特に談話においてはそれほど高くないという傾向も影響していると考えられるが、フランス語への指示代名詞の対応という点では抽象的なものを指示したり、具体的なものを漠然と指示する用法が多いということが言える。中遠称の *quello* については、中性の *ce* との対応例が多いのは予想されることであるが、性数変化する *celui* との対応例も極めて多いという点が注目される。これは、英語の *that*, *those* にも見られるように、中遠称の指示代名詞が照応的に既出の名詞を指示する機能を有するためであると考えられる。これは、*quello* の持つ、あまり具体性を伴わない指示機能と照応代名詞としての機能の二面性によるものと言える。具体性を伴わない指示機能を有する点で共通するのが *ciò* である。関係詞の先行詞としての機能を果たす用法が *quello* と共通していることも、*ce* への対応例が多い理由として考えられる。

これに対して、具体性が高いのが *costui* であると言える。性数変化する *celui* や具体的に人を指示する人称代名詞への対応例がほとんどを占めることから、他の指示代

以上のことから、イタリア語の四つの指示代名詞の指示機能に関する具体性の度合いを示すと以下のように言える。



3. 3. 両言語における指示代名詞の違い

2 節で述べたように、両言語においてそれぞれ最も使用頻度が高い指示代名詞は、イタリア語が中遠称の *quello*、フランス語が中性の *ce* であった。いずれも 6 割以上の割合を占めており、両言語において中心的な位置を占める指示代名詞であると言える。この二つの指示代名詞に着目すると、興味深い事実が浮かび上がる。イタリア語の *quello* の全生起例 628 のうち、フランス語において対応表現が見られたものが 531 例となり、84.6%を占めている。これに対して、フランス語の *ce* の全生起例 1962 のうち、イタリア語において対応表現がみられたのは 509 であり、わずか 25.9%に過ぎない。この極端な差はどのような要因によるものであろうか。

まず挙げられるのが、両言語の統語的特徴の差である。イタリア語はいわゆるプロドロップ(pro-drop)言語¹⁵であり、主語の省略が可能な言語であるのに対して、フランス語は不可能である。

- (29) a. Si ritrovò davanti alla grande macchia molliccia della mussolina e al rettangolo di luce, immobili l'una e l'altro in quella notte senza tempo.
- b. Il se retrouvait en face de la tache molle de la mousseline et du rectangle de lumière, immobiles dans cette nuit où le temps n'existait plus. (CH p.9)

“彼は再び蚊帳のおぼろな斑点と長方形の光に直面した。それらはもはや時間とい

40

うものがなくなったこの夜の中で、じっと動かなかった。

中性代名詞は être(be)の主語として用いられることが多いことから、イタリア語においては省略される例が多いということが言える。

(30) a. Ricordo come fosse oggi. (BR p.3)

(I) remember as were today

b. Je m'en souviens comme si c'était hier.

I remember as if that were yesterday

“私はそれが今日のことのよう思い出される。”

しかし、イタリア語においても主語が必ず省略されるわけではない。実際、ce の生起例のほぼ 4 分の 1 においてイタリア語の対応例が見られる。そのため、他の要因も関与していると考えられる。

ここで、quello と ce の基本的性質の違いについて確認しておこう。quello は中性としての用法ももっているが、本来は性数変化する指示代名詞であり、中性代名詞そのものではない。これに対して、ce は性数変化をしない純粋な中性代名詞である。中性代名詞とは、抽象的な内容を指示することができるのは当然であるが、具体的な事物を指示する場合でもその性数をキャンセルした形で指示するという特徴がある。その証拠として以下の例があげられる。

(31) Ces gens de campagne, c'est si rapace.

these people of country that is so rapacious-m.sg.

“田舎者ってのは実に強欲だ。”

この例は、主語の役割を担っている名詞句を中性代名詞 ce が受け直している左方転位構文である。ここで留意すべきは、ce で受け直した場合性数が中和されて一致が無標の男性単数形でなされているという点である。このことから、フランス語の ce はあらゆるものをいわば漠然とした形で指示するという機能をもっている。すると、そもそも性数変化をするイタリア語の quello よりもより広い範囲で物事を指示することが可能な要素であると考えることができる。逆に言うと、フランス語の ce が指示できるものをイタリア語の quello が必ずしも指示できないということになる。これがまさに、ce と quello の同テキストにおける生起数の大きな差となって現れているのである（1962 例に対して 628 例）。

この特徴は、実は ce だけに限られたものではない。同じ中性代名詞として位置付けられる cela, ça にも同様の傾向が見られる。cela の生起例 167 のうちイタリア語に対応表現が見られるのが 107(64.1%)、ça の生起例 489 のうちイタリア語に対応表現が見られるのが 182(37.2%)と quello の比率に比べていずれも低くなっている¹⁶。

¹⁶ cela の割合は、ce や ça に比べて高くなっている。これは、cela が語りにおいて多く用いられる形式であることが関係しているように思われる。談話に比して語りにおいては指示対象がある程度明確に捉えることができる場合が多い。このため、cela にイタリア語の対応表現が見られる例が多く観察されることが考えられる。

既に見たように、イタリア語においても性数変化しない中性代名詞 *ciò* が存在する。これがフランス語の中性代名詞に対応するという可能性も考えられるにもかかわらず、なぜそのような対応例が少ないのかというと、そもそもイタリア語において *ciò* の使用頻度が極めて低く、もっぱら語りにおいて用いられるという理由があげられる。また、フランス語の *ce* や *ça* は具体的なものを漠然と捉えなおすという指示機能を有するが、イタリア語の *ciò* にはそのような機能がなく、抽象的な内容を受ける機能に限られる。このことから、イタリア語においてはフランス語に見られるような幅広い機能をもつ中性代名詞が存在しないということが言えるのである。

3. 4. 語りと談話の違い

以上の分析はテキスト全体において見られる傾向であるが、指示代名詞は直示表現としても用いられるため、語りと談話で差が出るということが考えられる。そこで、語りと談話のいずれにも既に提示した傾向が成り立つのかを確かめるために、語りと談話に分けて分布を見ていく。

まずフランス語の指示代名詞の分布は以下の通りである。

語り

	<i>questo</i>	<i>quello</i>	<i>ciò</i>	<i>costui</i>	人 称 代 名 詞	その他
<i>ce</i> 290 例	12 (4.1%)	137 (47.2%)	21 (7.2%)	1 (0.3%)	7 (2.4%)	112 (38.6%)
<i>cela</i> 67 例	25 (37.3%)	4 (6.0%)	7 (10.4%)	0	4 (6.0%)	27 (40.3%)
<i>ça</i> 30 例	4 (13.3%)	0	0	0	1 (3.3%)	25 (83.3%)
<i>ceci</i> 3 例	2 (66.7%)	0	0	0	0	1 (33.3%)
<i>celui</i> 239 例	0	156 (65.3%)	1 (0.4%)	8 (3.3%)	2 (0.8%)	72 (30.1%)
<i>celui-ci</i> 55 例	4 (7.3%)	4 (7.3%)	0	0	14 (25.5%)	33 (60%)
<i>celui-là</i> 18 例	1 (5.6%)	7 (38.9%)	0	1 (5.6%)	1 (5.6%)	8 (44.4%)

談話

	questo	quello	ciò	costui	人 称 代 名 詞	その他
ce 219 例	37 (16.9%)	103 (47.0%)	6 (2.7%)	1 (0.5%)	4 (1.8%)	68 (31.1%)
cela 40 例	23 (57.5%)	1 (2.5%)	1 (2.5%)	0	2 (5%)	13 (32.5%)
ça 152 例	51 (33.6%)	3 (2.0%)	4 (2.6%)	0	19 (12.5%)	75 (49.3%)
ceci 9 例	4 (44.4%)	0	0	0	0	5 (55.6%)
celui 70 例	1 (1.4%)	46 (65.7%)	0	7 (10%)	0	16 (22.9%)
celui-ci 19 例	8 (42.1%)	1 (5.3%)	0	8 (42.1%)	1 (5.3%)	1 (5.3%)
celui-là 7 例	3 (42.9%)	3 (42.9%)	0	1 (14.3%)	0	0

ここでまず指摘しておきたいのは、cela と ça の分布である。2 節で見たように、ça は cela の短縮形であることから、前者は談話において、後者は語りににおいて主に用いられると予想されるが、実際には両者は競合しており、ça が語りで用いられる例や cela が談話で用いられる例が一定数観察されることは興味深い事実である。

次に、この調査結果において、語りと談話の間に顕著に見られる違いとしてあげられるのは、ce, cela, celui-ci, celui-là のイタリア語への対応であろう。いずれの要素についても、語りでは低い割合でしかなかった questo への対応が談話において高くなっている。この要因は次のように考えられる。談話においては、語りよりもより具体的な内容について言及されることが多く、指示代名詞が指す内容も具体性が高いものが多くなる。questo は近称であり、quello が抽象的な内容を指示することが多く見られるのに対して、具体的な事物や内容を指すことが多い指示詞である。このために、談話において questo に対応する例が多くなっていると説明される。

もう一つ興味深いのは、celui-ci と celui-là の対立である。2 節で言及したように、本来は接辞-ci が近接性、-là が遠隔性を表すが、現代ではその差が中和され là が用いられる傾向にある。先行研究では特に口語（本稿の視点では談話）においてその傾向が顕著であると述べられていたが、今回のイタリア語との対応に関する調査では必ずしも語りと談話で鮮明に区別されるわけではないという結果が出ている。celui-là については、確かに語りよりも談話において中遠称の quello ではなく近称の questo に対応する例が多くなっている。しかし、それでも両者に対応する例の割合はほぼ同率となっており、celui-ci を用いる場合がないとは言えない。celui-ci についてはむしろ語りににおいて quello に対応する割合が questo に対応する割合と等しくなっている。こ

のことから、両者の中和は必ずしも徹底されているわけではなく、まだ部分的な段階にとどまっていると考えることができる¹⁷。いずれにしても、celui-ci に quello が、celui-là に questo がそれぞれ対応している用例が一定数観察されることから、-ci が近接性、-là が遠隔性という特徴は揺れが見られるということが言える。

次に、イタリア語の指示形容詞の分布を示す。

語り

	ce	cela	ça	ceci	celui	celui-ci	celui-là	人 称 代 名 詞	その他
questo 77 例	12 (15.6%)	25 (32.5%)	4 (5.2%)	2 (2.6%)	0	4 (5.2%)	1 (1.3%)	4 (5.2%)	25 (32.5%)
quello 357 例	137 (38.4%)	4 (1.1%)	0	0	156 (43.7%)	4 (1.1%)	7 (2.0%)	9 (2.5%)	40 (11.2%)
ciò 32 例	21 (65.6%)	7 (21.9%)	0	0	1 (3.1%)	0	0	0	3 (9.4%)
costui 16 例	1 (6.3%)	0	0	0	8 (50%)	0	1 (6.3%)	4 (25%)	2 (12.5%)

談話

	ce	cela	ça	ceci	celui	celui-ci	celui-là	人 称 代 名 詞	その他
questo 136 例	37 (27.2%)	23 (16.9%)	51 (37.5%)	4 (2.9%)	1 (0.7%)	8 (5.9%)	3 (2.2%)	0	9 (6.6%)
quello 174 例	103 (59.2%)	1 (0.6%)	3 (1.7%)	0	46 (26.4%)	1 (0.5%)	3 (1.7%)	3 (1.7%)	14 (8.0%)
ciò 11 例	6 (54.5%)	1 (9.1%)	4 (36.4%)	0	0	0	0	0	0
costui 25 例	1 (4%)	0	0	0	7 (28%)	8 (32%)	1 (4%)	6 (24%)	2 (8%)

ここで注目される語りと談話の違いは、questo と quello に関してである。questo は語りにおいてそれ程見られない ça への対応が談話において多く見られ、ce に対応している例も談話において多くなっている。また、quello は語りにおいて celui への対応の割合が高いのに対して、談話においては語りに比べて割合が下がっている。

questo に関しては、ça が主に口語において cela の代わりに用いられる形式であることを勘案すれば当然のことであると言える。ce, ça に対応する例が談話において多くなっているのは、questo が談話において漠然と指示する用法が多く見られるということを示していると言えよう。

¹⁷ 今回の調査では、celui-ci と celui-là の用例数自体が少ないために、断定的な結論を下すことはできない。さらにコーパスを増やし、用例数を増やすことによって検証する必要がある。

quello に関する傾向もこれと同じ要因によるものと考えられる。談話において celui への対応の割合が下がっている分、割合が上がっているのは ce である。celui は性数変化をする要素で、中性代名詞よりも具体性が高い。語りよりも談話において事態や事物を漠然と指示する用法が多く見られるということである。

4. 結論

本稿では、フランス語の指示代名詞とイタリア語の指示代名詞の分布上の対応を観察し、両者の関係を明らかにすることを試みた。イタリア語の指示詞は距離に基づいた二項体系をなすと言えるが、フランス語の場合には既に指摘されてきたようにこの区別が曖昧なものとなっている。本稿の分析は、実際の用例によってその対応関係を明らかにすることを目指しており、従来の視点では明らかにできなかった部分を示すことができた。

フランス語の指示代名詞については、cela, ça, ceci, celui-ci が具体性を伴う指示性を有するのに対して、ce, celui, celui-là は抽象性を伴う指示性をもつという傾向が見られた¹⁸。特に celui-ci は人称代名詞との対応が一定数見られ、特に具体性が高い要素であるということが明らかになった。また、celui-ci と celui-là の距離に関する対立の中和が見られるのは確かだが、部分的な程度にとどまっていることが分かった。更に、cela と ça については、後者が前者の短縮形であることから、前者が語り、後者が談話においてそれぞれ用いられるという印象があるが、実際には語りにおいて ça が、談話において cela が用いられる例が一定数見られ、両者が一部競合していることが分かった。

イタリア語の指示代名詞については、costui が具体性が極めて高いのに対して、ciò が極めて具体性が低く、それに次いで questo も低くなっており、quello が中間的な位置を占めることが明らかになった。また、questo と quello は談話において抽象的に漠然と指示する機能が多く見られることが分かった。

また、両言語を比較すると、フランス語においては中性の指示代名詞の形式が複数あり、その使用頻度も極めて高いのに対して、イタリア語においては ciò という形式のみでありその使用頻度は決して高くはない。この違いが両言語における指示代名詞全体の使用頻度にも大きく影響しており、中性指示代名詞というカテゴリーが指示代名詞の体系において大きな位置を占めているフランス語の方が、指示代名詞を頻繁に用いる傾向が強いということが示された。

本稿は、両言語の指示代名詞の対応関係について、限られたコーパスで得られた結果をもとにして考察を進めたものであるが、まだ残された課題がある。一つは、コーパスとしてのテキストの数を増やし、今回得られた結果が確認できるかを検証することである。また、語りと談話という文体上の区別にとどまらず、それぞれの指示詞の機能、特に直示と照応に分けて考察を進めることで、有意義な結果が得られるであろう。

¹⁸ 査読委員から、celui-ci が具体性、celui-là が抽象性をそれぞれ伴うのは、近一遠という空間的対立から具体－抽象という対立へのメタフォリックな拡張ではないかという指摘があった。そのような可能性は極めて高いと思われる。指示形容詞における -ci, -là の用法も考慮しながら、今後検討したい。

う。更には、指示代名詞と深い関係をもつ他の代名詞、特に人称代名詞との関係について分析を進めていくことも将来的に求められる方向性であると言える。

参考文献

- Andorno, Cecilia (1999) *Dalla grammatica alla linguistica*, Paravia, Torino.
- Batchelor, R. E. and M. Chebli-Saadi (2011) *A Reference Grammar of French*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Benveniste, Émile (1966) *Problèmes de linguistique générale, 1*, Gallimard, Paris.
- Dardano, Maurizio and Petro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- Deloffre, Frédérique et Jacqueline Hellegouarc'h (1988) *Éléments de linguistique française*, Editions C.D.U. et SEDES réunis, Paris.
- Grevisse, Maurice and André Goosse (2011) *Le bon usage*, Duculot, Paris.
- Iorio, Raffaele (1996) *La grammatica della lingua francese d'oggi*, Loffredo Editore, Napoli.
- Judge, Anne and F. G. Healey (1995) *A Reference Grammar of Modern French*, NTC Publishing Group, Lincolnwood.
- Louette, Henri (1987) *Nouvelle grammaire de la langue italienne*, Éditions Roudil, Paris.
- Luciani, Giovanni and Yves Guiraud (1998) *Grammatica pratica del francese dalla A alla Z*, Editore Ulrico Hoepli, Milano.
- Maiden, Martin and Cecilia Robustelli (2000) *A Reference Grammar of Modern Italian*, Arnold, London.
- Maingueneau, Dominique (1994) *L'énonciation en linguistique française*, Hachette, Paris.
- Martinet, André (1979) *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier, Paris.
- Price, Glanville (2003) *A Comprehensive French Grammar*, Blackwell Publishing, Malden.
- Proudfoot, Anna and Francesco Cardo (2013) *Modern Italian Grammar*, Routledge, London and New York.
- Renzi, Lorenzo et al. (2001) *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.
- Sensini, Marcello (1997) *La grammatica della lingua italiana*, Oscar Mondadori, Milano.
- Serianni, Luca (1997) *Italiano*, Garzanti Editore, Milano.
- Tartaglino, Anna Cazzini and Véronique Gfeller (1993) *Grammatica francese*, Avallardi, Milano.
- Trifone, di Pietro and Massimo Palermo (2000) *Grammatica italiana di base*, Zanichelli, Bologna.
- Ulysse, Odette and Georges Ulysse (1988) *Précis de grammaire italienne*, Hachette, Paris.
- Vallé, Annette (2003) *Guide de grammaire italienne avec exercices*, Éditions De Boeck, Bruxelles.
- Wagner, Robert Léon and Jacqueline Pinchon (1991) *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette, Paris.
- 朝倉季雄 (2002) 『フランス文法事典』, 白水社, 東京.

引用テキスト

- André Malraux (1946) *La condition humaine*, Gallimard, Paris.
- André Malraux (1997) *La condizione umana*, Traduzione di A. R. Ferrarin, Bompiani, Milano.

Italo Calvino (1993) *Il barone rampante*, Arnoldo Mondadori Editore, Milano.

Italo Calvino (2001) *Le baron perché*, traduit par Juliette Bertrand, Éditions du Seuil, Paris.

J. M. G. Le Clézio (1963) *Le procès-verbal*, Gallimard, Paris.

J. M. G. Le Clézio (2005) *Il verbale*, Traduzione di Silvia Baroni e Francesca Belviso, due punti edizioni, Palermo.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail： fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学